

おこめ・野菜をテーマに交流しよう

熊本市立城北小学校 上村 孝直

1 実践の概要

食料自給率は4割、米を除けば2割を切るという、先進国では異常な状態の続いているのが、我々の住むこの日本である。まさに壊滅寸前とも言える我が国の農業は、国会では「食育教育基本法」の制定までもが俎上に上るほど、子どもたちからも遠い世界のものになりつつある。

だが、子どもたちは本来土に触れること、農作業に親しむことを嫌いだとは思っていないのではないか。私は、前任校の武蔵小でおこめづくり、桜島ダイコンの栽培に取り組んだ。卒業記念の文集には「おこめの学習やダイコンプロジェクトなど、貴重な体験がたくさんできてよかったです」

「田植えをしたり稲刈りをしたり、今までやったことのないことを経験して、たくさんのことを学びました」といったコメントが多数寄せられた。

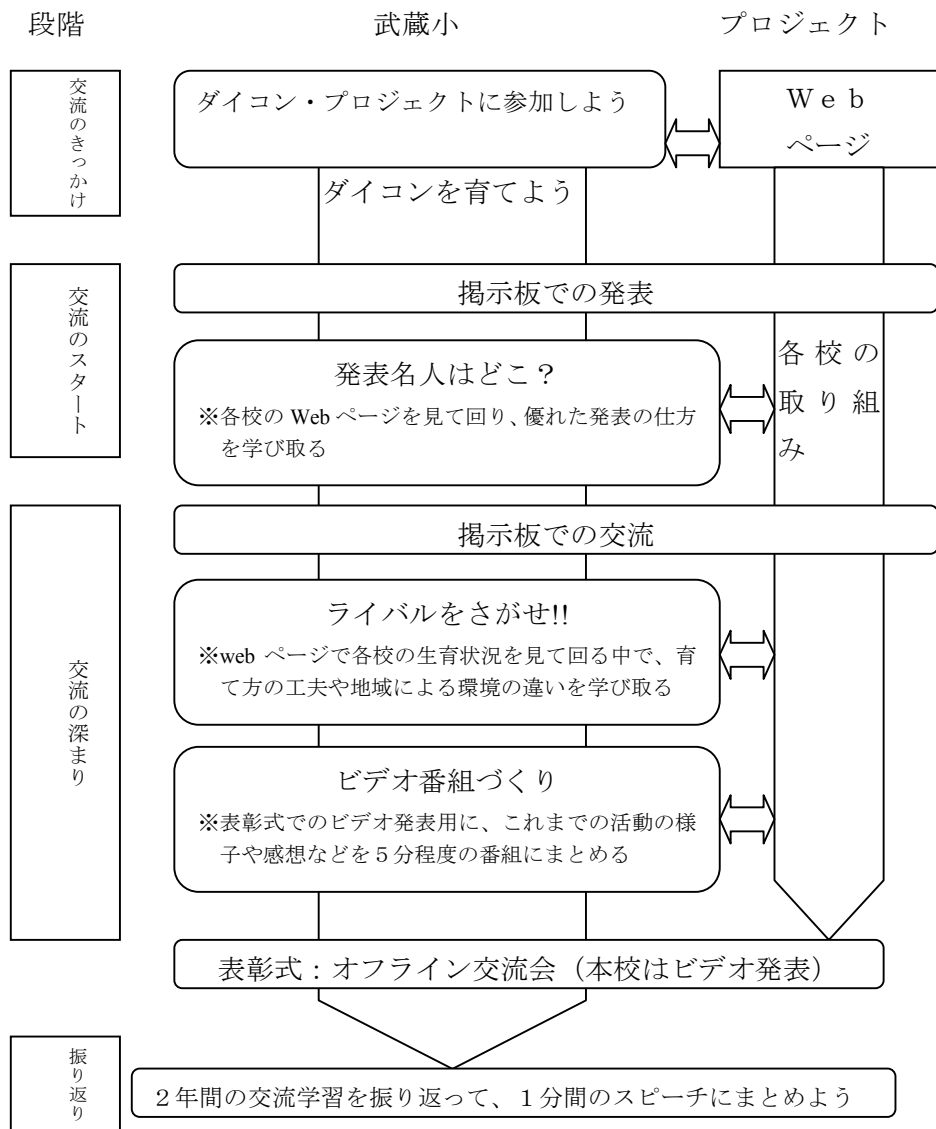
26名中16名が、農作業の楽しさをつづっていたのである。他にも話題には事欠かない中で、これは物凄い割合である。

では、その違いはどこから生まれたのだろうか。それは、以下のようなねらいを明確にして取り組んだからだと思われる。

- ・ 子どもたちが取り組む栽培活動を単なる体験活動に留まらず、インターネットやテレビ会議、ビデオレターなど、様々なIT機器を活用した「交流学习」のレベルにまで高める。
- ・ 活発な交流活動を通じて、同じ活動に取り組む同じ年代の多くの仲間たちと、栽培における様々な苦労や喜びを分かち合う。

そんな子どもたちとの2年間を、ここでは紙幅の都合から最後の半年余りで取り組んだ「桜島ダイコン栽培プロジェクト」に絞って、振り返ってみたい。

2 交流学習の流れ



3 この交流学习のもつ魅力

(1)「ギネス認定・世界一の太根」の魅力を大切に（コラボレーション）

「桜島ダイコンを育てよう」と聞いた時の子どもたちは、一様に驚いた。「桜島ダイコンって、熊本でも育つと？（先生にもやってみらんと分かん）」「どこで育てると？（狭かばってん、学級園しかなかたい）」「ちゃんと育つと？（???）」



…そんな子どもたちに、「全国一斉桜島ダイコン栽培プロジェクト」のホームページを見せ、前年度の様子を紹介する。このプロジェクトは、鹿児島県垂水市立大野小中学校（当時）の図師弘秋先生が発起人となり、平成12年度に全国12校が参加して始まった。その後年を追うごとに参加校が増え、平成15年度は44校に膨らんでいる。それだけ、こうしたタイプの学習に対するニーズが急速に高まっていると言えよう。

プロジェクトの概要は、各年度のスタートが9月の桜島ダイコンの種まきで、その後各校が工夫を凝らしながらより大きい（重い）ダイコンを育てていく。その様子を電子掲示板で公開することが参加要件で、1週間以上書き込みがなければ除名されるという厳しい掟もある。育てていく中で、だんだん他校の様子が気になるようになり、そこから交流が生まれてくる。途中で、指導者のオフライン研修会やマスコットキャラクター募集などの仕掛けも用意されている。そしてゴールは2月に行われるオフラインの表彰式。ここで優秀校が表彰され、半年余りにわたる交流を終える。まさに、プロジェクト型交流学习の典型である。

すっかり魅せられた本学級も、この「ダイコン・プロジェクト」に参加することにした。

(2) 多くの人たちとの関わりを大切に（コミュニティ）

と言っても、事務局から送られてきた種を、どう蒔けばいいのか…幸い、桜島町役場のホームページに詳しい栽培法が載っていたので、参考にした（後日、農家が使う種まで送って下さった）。また、2年間の「おこめ」学習でサポーターとして協力して下さったスイカ（齊藤）さん・AGCAT（鶴山）さんからも資材の提供と多くのアドバイスを受けた。おふたりのおかげで、種まきで出遅れた本校も順調に生育を遂げ、「もしかしたら上位入賞も？」という淡い期待が膨らむ。

ちょうどそんな折、前年度3位入賞の学校から、本校の掲示板へ書き込みがあった。これをきっかけに、急速に各校の生育状況に関心を持ち、各校の掲示板を眺め、自分たちのと比べては一喜一憂するようになった。

(3) ビデオを通じた交流（コミュニケーション）

2月7日、桜島町を会場にいよいよオフラインの表彰式。さすがに県外の本校は参加できないので、代わりに栽培の様子をネタに、大河ドラマ「武蔵」をヒントにしたコントや、「桜島ダイコンの歌」の歌と踊りなどを組み込んだ4分ほどのミニ番組にまとめ、ビデオによる発表を行った。それが放映された時の聴衆の反応や他校の発表などは、私がつぶさに撮影して、週明けに子どもたちに見せた（後日事務局からさらに詳しいビデオまで送られて来た）。子どもたちは、ビデオを通してではあるが、自分たちの番組の良かった点や足りなかった点を冷静に振り返ることができ、また他校の優れた点を多く学ぶことができた。

なお、このプロジェクトの概要を報じたNHK鹿児島放送局の特集番組の中で、本校の番組の一部が採用されたオンエアされたそうだ。

4 この学習で培うことのできた力

(1) 共に育てることの苦労と喜び

残暑厳しい中での畑づくりに始まり、水掛けや毎日のハウスの開け閉めなど、子どもたちは多くの苦労を味わった。これまでかわいいと思っていたモンシロチョウやオンプバッタから幼葉を守る大切さも思い知った。こうした活動に粘り強く取り組めたのは、交流校から日々もたらされる情報に、「自分たちも負けてはおれない」という気持ちが働いたからだと言える。同時に各校のまた別の苦労、特に北国の学校が雪の中から凍り付いたダイコンを掘り出す様子に、強く心打たれていた。

このようなダイコンプロジェクトを、子どもたちは「楽しかった」で25人中18人が4点満点に評価している（平均3.7）。互いの苦労を共有し合うことで、それが喜びに変わっていったことがうかがえる。

(2) 専門家や先輩から学ぶ喜び

子どもたちが生育状況をほぼ毎日書き込み続けた掲示板は、他校はもちろん保護者や学習サポーターにも見守られていった。その中には、貴重な書き込みを寄せて下さった方もあった。

中でも、「おこめ作り体験学習」の頃からお世話になっているスイカさんからのネットを通じた即座の具体的なアドバイスは、子どもたちの更なる活動への

意欲に大いにつながっていった。また、本校は初の桜島ダイコン栽培への挑戦なため、自分たちの育てているダイコンの育ち具合が他校に比べてどうなのか不安に思っていたのだが、昨年度3位入賞校である枕崎

1ヶ月たった！



だいたい1ヶ月前に桜島大根の種を植えました。
1ヶ月たった今は、こんなに大きくなりました。
とても嬉しいです。

2003年10月28日(日) No.31

スイカです 2003/10/29/23:36 No.32

大根が大きくなりました。とても楽しみです。乾燥していますので、少し水を与えてください。マルチの隅からでもいゝと思います。縦からやり、やりすぎに注意してください。そのときに、肥料を一番み、マルチの穴に入れてください。一株に2〜3箇所です。

しま・やすこ・あい 2003/11/04/13:45 No.35

スイカさんアドバイスありがとうございます。今度水やりをするときに、注意して肥料をやってがんばって大きく育てたいと思っています。これからも、アドバイスお願いいたします。

大きく育ってきた葉っぱ！



今日、大根を見てみたら葉っぱが起き上がってきました。葉っぱの
長さはお7cmになっていました。大根が育って畑に入らなくなりまし
た。中の大根もどのくらい大きくなっているか楽しみです。

2003年12月01日(日) No.45

秋小ねる 2003/12/04/07:58 No.46

すごいですね！67cmもあるかー。私の大根の葉っぱは、60cmです。次は大根を、育てるよに、お互い1株採
りましょう。

小の児童から「すごいですね！」と褒められたことは、子どもたちにたいへんな自信をもたすとともに、読む人の立場に立った書きこみをすることの重要性を再認識するきっかけとなったようだ。

(3) 表現する力は

本校の子どもたちの書き込みは、初期には漠然とした内容の写真や文章によるものばかりだった。しかし、経験を重ねる毎に内容がより具体的になり、文章も詳しくなってきた。特に11月に各校による表現の工夫を検討する学習を経験してからは、比較となる物をわざと一緒

に写したり、具体的な数字を書き加えたりするといった工夫をするようになった。これは、子どもたちが分かりやすい表現というのはどのようなものを理解し、自分たちの表現に役立てていこうという意識を持つようになってきたことの表れであると考えられる。

【児童の感想】

全然ちがう地域の人たちと掲示板で交流できて、楽しかったです。他の地域との育ち方のちがいが写真でよく分かったので学ぶことが多かったし、武蔵小のこともほかの学校に伝えられて、とても勉強になりました。



5 この交流学習を振り返って

農作物をテーマにした交流学習は教師である私から見ると、ここまで述べてきたように、子どもたちにとって非常に貴重な経験となり、いろいろな力を培うことができたと確信している。では、ずっとこの学習を見守ってきたサポーター（農家）は、これらをどう見たのだろうか。



【熊本市・齊藤勝治さんの話】

総合学習が始まってから、農業に関する情報提供を求められることが増えた。そうした学習を通して少しでも農作物に関心を持って欲しいと思い、できるだけ協力している。今回のように素直な反応が返ってくると嬉しいし、そういう素直な気持ちを持ち続けて欲しいので、こちらも応えようとさらにがんばってきた。

武蔵小の子どもたちとは、初めは私と先生と子どもたちがお互いに距離のある△の関係だったが、掲示板での交流を通じてみんながひとつになる○の関係になってきた。だから、ダイコン収穫祭（写真左端が齊藤氏）では初めて会った感じがしなかった。

農作物はたくさんの手間暇を掛けながら少しずつ大きくなってようやく食べることができる。人間関係も同じで、いっぺんには仲良しになれない。お金を出せば簡単に手に入るというものではない。この2つには、相通ずるものがある。これからも、農作物の栽培と交流学習をリンクさせていけばうまくいくと思う。

【八代市・鶴山正行さんの話】

子どもたちから見た農業、たとえば以前先生に見せてもらった「トマト星人」や「土の中に実るトマト」などにとっても興味を持ち、以来そうした子どもたちが農業を体験してどんなことを感じているを知りたくて関わらせてもらっている。

農作物の栽培を通じた交流学习で、子どもたちが農業に関心を持ってくれ、そこから将来農業をやってくれる人がでてくれば、日本の農業は強くなると思う。また、農家は、自分の仕事にこだわりを持っているのに、それを出すのがとても下手。子どもたちとの交流を通して、農家自身も視野を広げる勉強をしなければいけないと感じている。